

「東大阪モノづくりイノベーションプログラム」  
文部科学省大学院教育改革支援プログラム

第2回（最終）外部評価報告書

平成23年2月

近畿大学大学院 総合理工学研究科

## 目次

1. はじめに-----	3
2. 「東大阪モノづくりイノベーションプログラム」の概要-----	4
3. 第2回（最終）外部評価委員会の開催-----	4
4. 評価結果について-----	6
5. 外部評価委員による講評と提言-----	8
6. まとめ-----	9

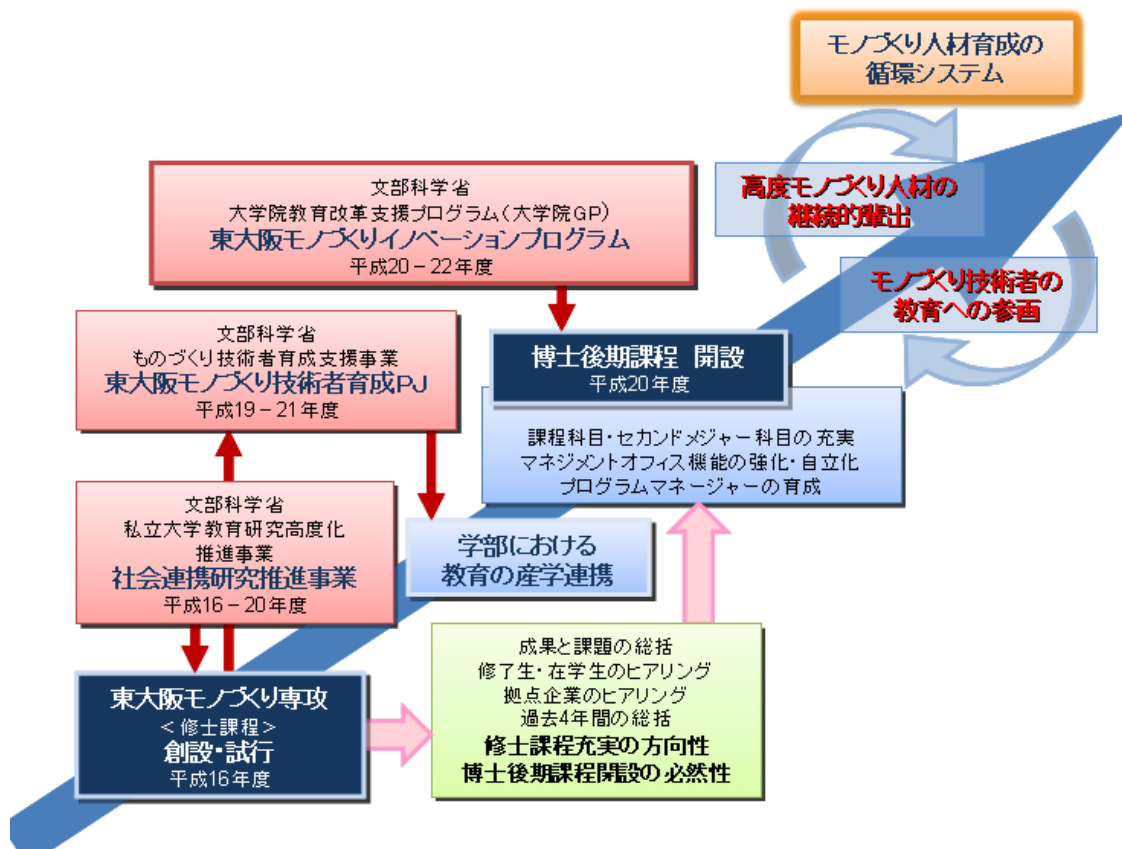
### 添付資料

資料1 成果報告会・第2回（最終）外部評価委員会プログラム-----	11
資料2 成果報告会・第2回（最終）外部評価委員会の光景-----	12
資料3 外部評価シート-----	13

# 1. はじめに

近畿大学大学院総合理工学研究科では、平成16年新しい概念の大学院「東大阪モノづくり専攻」(修士課程)を開設した。学生-教員-企業技術者が三位一体となった“教育の産学連携”によって、モノづくり技術を修得し、革新的技術を開発することのできる、実社会と乖離しない技術者を育成する教育プログラムを構築してきた。

さらに、この手法を学部教育にも適用すると同時に、平成20年には博士後期課程を開設し、学部から大学院博士後期課程まで一貫した理念のモノづくり人材育成プログラムを提供している。



学部における“教育の産学連携”の取り組み「東大阪モノづくり技術者育成プロジェクト」は、平成19年度文部科学省ものづくり技術者育成支援事業に採択され、高い評価を得ている。この間、東大阪モノづくり専攻の成果と課題、社会の要請を総括し、大学院教育実質化のための教育プログラムを開発し、「東大阪モノづくりイノベーションプログラム」として平成20年度文部科学省大学院教育改革支援プログラムに採択された。

「東大阪モノづくりイノベーションプログラム」は、平成22年2月26日に第1回の外部評価委員会において、外部有識者の忌憚のないご意見、ご提言をいただく機会を得、さらに前向きに改善に取り組んできた。さて、「東大阪モノづくりイノベーションプログラム」は平成23年3月末で終了する。今回第2回(最終)の外部評価委員会を開催し、再度外部有識者の忌憚のないご意見、ご提言をいただく機会を持った。関係者一同真摯に受け止め、今後も継続して教育改革に取り組む所存である。

近畿大学大学院総合理工学研究科 教授・取組代表者  
沖 幸男

## 2. 「東大阪モノづくりイノベーションプログラム」の概要

近畿大学と東大阪地域の企業郡との産学連携教育の基盤となる「東大阪モノづくり専攻」を平成 16 年 4 月に総合理工学研究科に開設した。学生の教育研究の場を、近畿大学および大学の位置する東部大阪地域のモノづくりに秀でた企業の研究開発室の両方に設け、指導教員と企業の開発責任者が密接に協力することにより、学生は開発研究の実務を経験しつつ、基礎および専門教育と研究開発の指導を受けることができる。これまでのインターンシップに代表される教育の産学連携は、短期および中長期の体験型が主体であるのに対し、本専攻で実施しているのは長期・実践型（第三世代）の実学教育を実現している。

さらに、平成 20 年度から 3 年間「東大阪モノづくりイノベーションプログラム」として文部科学省「大学院教育改革支援プログラム」に採択された。大学指導教員、東大阪の企業技術者に加えて、学生を多面的に教育・指導できる体制を整えるために、企業や研究所で実績を積み、モノづくりに精通した、定年前後の技術者や研究者をシニアサイエンティスト・シニアエンジニア（SS&SE）として受け入れ、さらに子育てが一段落した女性研究者の力も積極的に活用している。

本専攻の 4 年間の成果と課題について、卒業生と参画企業のヒヤリングの結果も反映させて総括した結果、平成 20 年度から博士後期課程を設置するとともに、養成すべき人材像を明確に定めた。

すなわち、「東大阪モノづくりイノベーションプログラム」は、大学（教員および SS&SE）と東部大阪地域の企業郡が共同で進める、産学連携型人材育成の試みである。本プログラムの人材育成の特徴は、1）長期・実践型（第三世代）の産学連携教育、2）セカンドメジャー制度の導入による専門分野外の基礎知識と幅広い視野を持った人材育成、3）社会人力や社会感覚の養成、国際性の涵養、倫理・コンプライアンス教育・MOT 教育などを含む総合的な研究者・技術者教育、4）スキルレベルの定義による目標の明確化、を含み、新しい価値を創造できる研究者・技術者を社会に輩出することを目指している。

平成 22 年 2 月 26 日(金)、近畿大学 38 号館 2 階多目的ホールにて、「東大阪モノづくりイノベーションプログラム」文部科学省大学院教育改革支援プログラム（大学院 GP）に係わる一般公開の成果中間報告会を兼ねて第 1 回外部評価委員会を開催した。6 名の外部評価委員に、教育の産学連携を基本にした本プログラムについて、人材育成と成果、セカンドメジャー制度、企業経験者の活用、総合評価の視点から評価していただくとともに貴重なご意見をいただいた。それぞれの評価については、3（妥当）と 5（優れている）の間と評価していただいた。なお、人材育成と成果、セカンドメジャー制度の評価項目において、幾人かの外部評価委員の方が指摘された「到達点をどこにおくか」、「計画を立ててフォローするシステムが必要」などについては、平成 22 年度の事業計画に反映させ試行してきた。

今回の外部評価委員会は、大学院 GP の成果報告会と大学院博士後期課程の中間報告会を兼ねて実施した。博士後期課程の中間報告会は、本プログラムにおける「コースワークの充実」の一環である。セカンドメジャー科目の報告と併せて、学生による発表によって設定した各スキルレベルへの到達度が明らかになると考えたからである。

## 3. 第 2 回（最終）外部評価委員会の開催

平成 22 年 12 月 18 日（土）、近畿大学 38 号館 2 階多目的ホールにて、「東大阪モノづくりイノベーションプログラム」文部科学省大学院教育改革支援プログラム（大学院 GP）に係わる一般公開の成果報告会を兼ねて最終外部評価委員会を開催した（当日のプログラムは資料 1 参照）。

今回評価していただく項目は以下のとおりである。

- 1) 産学連携教育による人材育成と成果について。
- 2) セカンドメジャー制度による人材育成について。
- 3) MOT 科目の導入について。
- 4) 本プログラムの総合評価について。

上記評価項目に沿って外部評価委員会の議事を進行した。

なお、今回は次の外部評価委員の方々に出席していただいた（50 音順、敬称略）。

上村八尋（財団法人大阪産業振興機構 大阪 TLO コーディネーター）  
河村良一（東レエンジニアリング株式会社 専務取締役エンジニアリング事業本部長）  
阪本雅哉（株式会社ミリオナ化粧品 代表取締役社長）  
佐藤晴央（大阪府研究開発型企業振興会 事務局長）  
重松利彦（甲南大学 副学長）  
寺田幸夫（マイティ株式会社 代表取締役社長）  
森 秀次（酒井硝子株式会社 取締役熔融部長）

外部評価委員会の冒頭に、本事業の取組代表者である近畿大学大学院総合理工学研究科教授沖幸男から開会の挨拶、外部評価委員の紹介の後、本事業の概要と評価方法について説明があった。また、大学院 GP 担当のプログラムマネージャー浅野昌也から第 1 回外部評価委員会のまとめと対応についての報告があった。

その後、東大阪モノづくり専攻博士後期課程大学院生の報告、教員と学生によるセカンドメジャー制度の取組みについての報告、MOT 科目として一昨年から導入した「総合技術監理」の取組みについての報告の後、自由討議と外部評価委員による講評をいただいた。

まず、東大阪モノづくり専攻大学院生の報告として、博士後期課程 2 年生による 3 件の報告と博士後期課程 3 年生による 1 件の報告があった。博士後期課程 2 年生による 3 件の発表は、東大阪モノづくり専攻の博士後期課程中間報告会を兼ねている。3 件のテーマは、「植物資源構成分子の機能性開発に関する研究」「半導体レーザーによる炭素鋼の表面焼入れに関する研究」「高性能ヴィットリファイド結合剤を用いた CBN 研削砥石の開発」である。企業の研究開発の一翼を担った研究テーマらしく、特許出願に結びついた研究成果もあり、今後の製品化が期待される。博士後期課程 3 年生は、平成 23 年度国際学会で発表する予定の「無振動・無衝撃台車を目指して」を報告した。これら 4 件の報告を聴講していただき、産学連携教育による人材育成と成果について評価していただいた。

セカンドメジャー制度の導入は、専門分野外の基礎知識と幅広い視野をもった人材の養成を目指している。指導教員以外の指導教員とは異なる専門分野の教員が担当し、博士前期課程の学生については主専攻としない分野で学士レベルの知識と研究能力を修得し、博士後期課程の学生についても主専攻としない分野で修士レベルの知識と研究能力

の修得を目指している。今回は、博士前期課程の東大阪モノづくり特別演習（必修）として、応用化学科の古南准教授が計測技術系の博士前期課程 1 年生に「高感度高機能光触媒の開発」および電気電子工学科の中野教授が生物・化学系の博士前期課程 1 年生に「電源回路の作成と評価」について取組んだ。それらの結果について、教員と受講した学生から報告があった。前者の取組は、新規な高機能光触媒材料の研究につながる成果であり、後者の取組によって、化学系の学生として回路図面を理解し読めるようになったということであった。

そして、博士後期課程の東大阪モノづくり特別演習（必修）として、機械工学科の岩崎教授が博士後期課程 2 年生に「QC 的ものの見方・考え方と経営方針の展開」について取組んだ。その結果について、教員と受講した学生から報告があった。外部評価委員の企業経験者から、最近の学生は「QC の 7 つ道具」を知らないという指摘があり、QC 的ものの見方・考え方を教育することの重要性について賛同していただいた。

本プログラムは、MOT 教育などを展開し総合的な研究者・技術者教育を行なうことも目標の一つである。そのため、「地場産業組織論 I、II」、「知的所有権」などの科目に加えて、平成 21 年度から「総合技術監理 I、II」、本年度から「コミュニケーションスキル」を開講した。「総合技術管理 I、II」を担当した浅野客員教授から、これらの MOT 科目の受講者の変遷についてレビューした後、「総合技術監理 I、II」の目標や達成度について報告があった。これらの MOT 科目の受講者数の変遷を見ると明らかに受講者数が増えており、当初は東大阪モノづくり専攻の講義であったが、他専攻の学生も多数受講するようになり、MOT 科目に対する期待が大きいことを認識した。今回は、このような MOT 科目の導入について評価していただいた。

続いて自由討論に入り、質疑のあった内容については本プログラム実施者や大学院生からの返答を含めて発言があり、最後に 7 名の外部評価委員から講評と提言を頂いた。その後東大阪モノづくり専攻長の五百井清から閉会の挨拶があり予定通り終了した（資料 2 に評価委員会の光景を示す）。

#### 4. 評価結果について

外部評価委員には、発表を聴講していただきながら資料 3 に貼付した外部評価シートに従って、5 項目について 5（優れている）、3（妥当）、1（改善の余地あり）の基準で 5 段階評価してもらったと同時にコメント（優れた点、改善点）を記入してもらった（以下では、各委員の評価点の平均値を示し、優れた点○、改善点●、コメント△で表示した）。なお、この外部評価シートが、評価委員会報告書を兼ねる。

（1）本プログラムは、指導教員と企業の開発責任者が密接に協力することによって長期・実践型の産学連携教育を実現し、新しい価値を創造できる研究者・技術者の育成を目指している。博士後期課程 2 年生と 3 年生の発表等を聴いていただいて、産学連携教育による人材の育成と成果について問うた。

①産学連携教育による人材の育成について	評価	4. 1
②成果について	評価	3. 3

○△さすがに大学院博士後期課程の学生であり、発表態度、話し方など立派であった。

- また、内容は専門的であり、ある程度予備知識がないと理解できない部分もあった。
- 一つの研究にとらわれず他方向から分析ができる人材の育成に多いに役立つのではないかと。
  - 非常に積極的にテーマの課題・解決をはかっていると感じた。ただし、応用力に不安がある（表面焼入れに対して硬さのみならず他の測定法もアプローチできないか、ウレタン素材以外の他の材質についても検討の可能性はないか等）発表もあった。
  - 当該分野の問題点と今回の研究の目的・目標を発表の始めにだしていただくと、もっと分かり安い発表になったと思われる発表もあった。また、単なる技術修得に終わった感じの発表もあった。
  - 研究の最終目標が不明瞭に思った。研究自体が目的でないのに、何に应用できるのかを明らかにすべし。

(2) 本プログラムは、セカンドメジャー制度導入によって、専門分野外の基礎知識と幅広い視野をもった人材の養成を目指している。担当教員（指導教員以外）と博士前期課程1年生と博士後期課程2年生の発表を聴いていただいて、セカンドメジャー制度の導入による人材の育成について問うた。

### ③セカンドメジャー制度による人材育成について 評価 4.0

- 前回セカンドメジャー制度について、学生および教員の負担となり良いイメージは持っていなかったが、今回の発表を聞き学生にとっても非常にメリットのある制度であると感じた。企業からも受講させて欲しいという希望者もいるのではないかと。
- 知らないことを体験できる機会の提供は、とても良い制度だと思います。
- △他分野を検討することにより幅広い知識と経験を保有でき将来強い技術者になると思う。企業経営に必要な人材育成法と思う。ただし、ややもするとその成果を出すことに必死になるが、他分野なのでそのプロセスを大事にすることを教えて欲しい。
- △研究途中の苦労話や進行課程をもっと詳しく報告してはどうでしょうか。また、QCの手法等は3回生あたりで初級は勉強して欲しい。
- △化学系の学生が電気を、電気系の学生が化学をセカンドメジャーとして学んだ訳ですが、金属系も取り入れてもっと多角的な人材の育成を期待したい。
- B4かM1で行なう教育ではないかとも感じます。

(3) 本プログラムでは、総合的な研究者・技術者を輩出すべく「地場産業組織論」「知的所有権」「総合技術監理」「コミュニケーションスキル」等のMOT科目の充実をはかっている。今回、「総合技術監理」等の発表を聴いていただいて、MOT科目の導入について問うた。

### ④MOT科目の導入について 評価 3.5

- 社会人学生の再教育としては優れている。このようなプログラムは中小企業には求められるであろう。
- 幅広い視野をもつために必要であると感じた。
- 「大学院GP」取組終了後も継続してMOT的な考えをもった人物を育成して行って欲

しい。

○△企業を意識した講義がなされていると感じた。今後は、企業と大学がコミュニケーションを取り合っ、最先端のテーマも導入していただきたい。

△MOT科目の工場見学には協力できると思います。

●特別講義は1コマだけでは短いのではないか。

(4) 本プログラムの総合評価を問う。

## ⑤総合評価

評価 3.9

○すばらしいプログラムです。

○地域密着型のプログラムで大変興味深く拝聴した。尼崎や神戸の“物づくり地域”へ紹介すれば、本成果を再評価してもらえらると思う。

○△このイノベーションプログラムを一部の人たちだけで聞くのはもったいないです。もっと多くの（特に東大阪の企業の）方々にも参加してもらい聞けるようにして欲しい。参画企業も増すのでは。

△テーマ選定が最も大事であると考えます。例えば、環境やエネルギーのような最先端のテーマを行なっていると、学生のモチベーション向上になると思う。

△現時点で成果について判断することは困難な点が多いと感じました。モノづくり専攻の特徴（従来の専攻やそこに入学した社会人学生との差別化）をどう出していられるのか期待しています。

## 5. 外部評価委員による講評と提言

第2回（最終）外部評価委員会の全ての発表・報告と質疑応答の後、ご出席の外部評価委員の方から講評と提言をいただいた。以下に当日の発言順に講評と提言の概要を記載する。

○発表は、企業と密接に関係のあるテーマでよかったと思う。今年よかったと感じたのは、「QC的もの見方」を取り入れられていることである。「QC的もの見方」は通常会社に入ってからやることが多いが、今回のように前倒して実施されているのは意味があると思った。また、MOT科目も実践型テーマであり、他の大学ではやれないテーマだと思った。

○素晴らしい発表であり、是非学会発表や査読論文としてまとめて欲しい。更に言わしてもらえらば、最先端のテーマ（例えば、リチウムイオン電池や燃料電池など環境・エネルギー分野）についても何らかの形で取り上げて欲しいと感じた。

○東大阪モノづくり専攻について、弊社も2年ほど前には関係したが、残念ながら工業化に至らず特許を出して終わってしまった。テーマ設定が重要と思う。MOT科目で知財などについて集中的に調べて工業化の可否が判断できるような学生を育てて欲しいと思った。セカンドメジャー制度については、学生によい機会を与え、役に立つのではないかと考えた。

○博士後期課程の学生の発表ということもあり、レベルの高い発表だったと思う。敢えて言わせてもらえば、この研究が最終的に何に結びつくのかこの研究によって何ができるのかを最初に明らかにしてもらえればもっとインパクトがあったと思う。セカンドメジャーの発表は、それぞれ専門外のことで苦労があったのではと思う。自分の苦労話をどんどん言ってもらえればよかったと思う。QC関係の知識は企業にとって必要であるが、大学で研究テーマを進めていく上でも、データのばらつきを統計的に処理する際に必要になってくると思う。学部あたりできちっと講義で教えて欲しい。なお、MOT科目で工場見学などを希望されるということであればもってきていただければ、手を挙げていただける企業はあると思う。

○ドクターコースに社会人を受け入れて、企業での研究を中心にして学位を出す大学は多い。また、私学などでは、アカデミックコース以外に企業にドクターを受け入れてもらえるよう意識して教育をしたり、マスターで一旦企業に出して社会人としてドクターコースに入ってきてもらうことをやっている。東大阪モノづくり専攻の場合は、これらとは異なり、研究の場としても研究テーマとしても企業が中心であるが、大学院教育としての仕組みづくりとしてはよくやっておられるという印象を持った。ただし、研究論文をどういう形でまとめていくのかというときに、本専攻の特徴である研究手法の広さの部分についてすごいなという感じが抱けなかった。今後、継続される中で是非考えていってもらいたい。

○モノをつくることは非常に難しい。売れる商品に仕上げることから儲かる商品にしなければならない。更に売れてくれば、品質管理が重要になる。1つや2つでは品質管理どころではないが、百も千も万もつくとするとどれをとっても規格を満足していなければならない。研究開発を一生懸命やっているが、コストや品質管理も重要である。現在の学生は8割方研究開発であるが、モノづくりの学生は研究開発6割、コスト2割、品質管理2割のバランスの取れた学生を育てて欲しい。セカンドメジャー制度はゆくゆくは大事になってくると思う。我々は化学品を造っているが、化学だけでなく機械のことを知っている人材は重要である。

○私どもの企業もモノづくり専攻に参画させていただいて、企業同志よりも大学との共同研究のほうが頼りになるという印象を持っている。セカンドメジャー制度については、昨年聴かせていただいて負担ばかり大きいシステムで否定的であったが、今回発表を聴かせていただいてこのシステムは学生にとって素晴らしいシステムであると思った。

## 6. まとめ

まず、「東大阪モノづくりイノベーションプログラム」文部科学省大学院教育改革支援プログラム（大学院GP）に係わる第2回（最終）外部評価委員会を有意義に開催することができ、ご多忙中にもかかわらずその任務を誠実に遂行していただいた7名の外部評価委員の方々に謝意を表す。

今回の外部評価委員会では、教育の産学連携を基本にした本プログラムについて、人材育成と成果、セカンドメジャー制度、MOT科目の導入、総合評価の視点から評価していただくとともに、貴重なご意見をいただいた。それぞれの評価については、4.に

詳細に記載したように、5段階評価において、3（妥当）と5（優れている）の間と評価していただいた。今後さらに5に近づけるようプログラムを充実させていきたい。

なお、外部評価委員の方々には、最後に講評と提言を具体的にいただいた。関係者一同真摯に受け止め、継続して教育改革に取り組む所存である。更なるご指導、ご鞭撻をお願いしたい。

以上

近畿大学大学院 総合理工学研究科・客員教授  
東大阪モノづくりイノベーションプログラム  
プログラムマネージャー 浅野昌也

## 資料1

近畿大学大学院 総合理工学研究科  
 文部科学省大学院教育改革支援プログラム「東大阪モノづくりイノベーションプログラム」  
 成果報告会・外部評価委員会の開催

近畿大学大学院総合理工学研究科東大阪モノづくり専攻は、平成20年度から「東大阪モノづくりイノベーションプログラム」として文部科学省「大学院教育改革支援プログラム」に採択され、大学教員、企業経験者（SS&SE）・企業技術者、学生が三位一体となって教育の産学連携を推進してきました。この度、本事業の最終年度を迎え、本取組について広く周知するとともに、このような産学連携型教育の取組について、企業や社会的な面から忌憚のないご意見とご評価をいただきたく、成果報告会・外部評価委員会を下記の要領で開催する運びとなりましたので、ご案内いたします。専攻に関心をお持ちの先生方、院生、進学予定者の参加を歓迎します。

## 記

日時：平成22年12月18日（土）13:20～17:00

場所：38号館2階S-204（多目的利用室）

プログラム：

1. 挨拶と外部評価委員紹介（総合理工学研究科 教授・取組代表者 沖 幸男） 13:20～13:25
2. 東大阪モノづくりイノベーションプログラムの概要と成果  
 （総合理工学研究科 教授・取組代表者 沖 幸男） 13:25～13:35
3. 第1回外部評価委員会のまとめと対応  
 （総合理工学研究科 PM・客員教授 浅野 昌也） 13:35～13:45
4. 東大阪モノづくり専攻大学院生の発表（博士後期課程2年生および3年生） 13:45～14:45
  - (1) 植物資源構成分子の機能性開発に関する研究
  - (2) 半導体レーザーによる炭素鋼の表面焼入れに関する研究
  - (3) 高性能ヴィトリファイド結合剤を用いた CBN 研削砥石の開発
  - (4) 無振動・無衝撃台車の実現を目指して
5. セカンドメジャー制度の導入  
 （担当教員および博士前期課程1年生および博士後期課程2年生） 15:00～16:00
  - (1) 高感度高機能光触媒の開発
  - (2) 電源回路の作成と評価
  - (3) QC 的ものの見方・考え方と経営方針の展開
6. MOT 科目（総合技術監理）（総合理工学研究科 PM・客員教授 浅野 昌也） 16:00～16:15
7. 自由討議と外部評価委員からのコメント 16:15～16:55
8. 閉会の挨拶（総合理工学研究科東大阪モノづくり専攻長 五百井 清）

以上

## 事務連絡先

577-8502 東大阪市小若江3-4-1 近畿大学大学院総合理工学研究科  
 東大阪モノづくりイノベーションプログラム 事務局（担当：向山）  
 Tel：06-6730-5880 ext. 5139  
 e-mail:daigakuinGP.monozukuri@itp.kindai.ac.jp

資料2 成果報告会・第2回（最終）外部評価委員会の光景



沖取組代表からの概要説明



大学院生の発表



セカンドメジャー制度の取組について説明される古南准教授（左）と中野教授（右）

平成 22 年 12 月 18 日

## 「東大阪モノづくりイノベーションプログラム」外部評価シート

本日は「東大阪モノづくりイノベーションプログラム」成果報告会・外部評価委員会にご臨席いただきありがとうございます。本日の報告、発表および討議に基づいて、下記について点数(5 点満点)評価していただき、忌憚のないご意見を賜りますようお願いいたします。

### 記

1. 本プログラムは、指導教員と企業の開発責任者が密接に協力することによって長期・実践型の産学連携教育を実現し、新しい価値を創造できる研究者・技術者の育成を目指しております。博士後期課程 2 年生と 3 年生の発表等を聴かれて、産学連携教育による人材の育成と成果についてお答え下さい。

評価(人材育成について): 5.(優れている) 4. 3.(妥当) 2. 1.(改善の余地あり)  
(成果について) : 5.(優れている) 4. 3.(妥当) 2. 1.(改善の余地あり)

コメント(優れた点、改善点について):

2. 本プログラムは、セカンドメジャー制度導入によって、専門分野外の基礎知識と幅広い視野をもった人材の養成を目指しております。担当教員(指導教員以外)と博士前期課程 1 年生と博士後期課程 2 年生の発表等を聴かれて、セカンドメジャー制度による人材の育成についてお答え下さい。

評価(セカンドメジャー制度): 5.(優れている) 4. 3.(妥当) 2. 1.(改善の余地あり)

コメント(優れた点、改善点について):

(裏面にお進み下さい。)

3. 本プログラムでは、総合的な研究者・技術者を輩出すべく「地場産業組織論」「知的所有権」「総合技術監理」「コミュニケーションスキル」等の MOT 科目の充実をはかっております。今回、「総合技術監理」等の発表を聴かれて、MOT 科目の導入について答え下さい。

評価(MOT 科目の導入について): 5.(優れている) 4. 3.(妥当) 2. 1.(改善の余地あり)

コメント(優れた点、改善点について):

4. 成果報告会・外部評価委員会全体を通じて、本プログラムの総合評価をお願いいたします。また、今後も本学において教育改善を継続して実施いたしますので、本プログラムについて忌憚のないご意見をいただきますようお願いいたします。

総合評価: 5.(優れている) 4. 3.(妥当) 2. 1.(改善の余地あり)

ご意見:

ご氏名: \_\_\_\_\_

ご協力ありがとうございました。